



営農NEWS



イネ紋枯病の発病進展に注意しましょう

イネ紋枯病の被害発生については、近年、ほとんど問題にならない状況でしたが、ここ 1~2 年前より発生の増加や被害が認められています。

この原因として、近年の気象の温暖化や、飼料用米など多肥栽培で被害進展に適する栽培様式が導入されてきたこと、また、28 年、29 年と 2 年間とも 8 月中旬以降に降雨量や降雨日数が多く、日照時間が少なかったなどの要因が本病の発病進展に好適な条件であったことなどが考えられます。さらに、近年は紋枯病の被害がほとんど問題にならなかったため、栽培中に本病の防除が実施されなかった状況も、ここ 1~2 年の発病増加や被害進展に係わっていると推察されます。

本病は、被害株にできた菌核が翌年の伝染源となるため、一度多発生すると次作でも発病しやすい傾向があります。収穫後、被害株に形成された菌核は圃場で越冬し、翌年の代かき時に田面水に浮上します。そして、移植されたイネ株に付着し、発病に適した温度条件になると菌核から菌糸を伸ばして感染します。感染拡大は菌糸で行われ、密植や多肥栽培の茎数過多で発病しやすく、7~9 月の高温、多雨で発病進展します。一般的には、発病は 6 月下旬~7 月上旬頃からみられ、はじめは水田内で発病株が増加拡大（水平進展）しますが、その後、出穂期近くから出穂後頃からは上位の葉鞘へ発病が進展（垂直進展）します。この時、第 3 葉鞘より上位に発病がみられるほど減収が大きくなり、また、強風雨や台風などで株が倒伏すると更に被害が甚大となります。

病害虫発生予報 8 月号（県病害虫防除所）によりますと、7 月下旬現在、イネ紋枯病の発病株率（本年 1.4%、平年 0.9%）、発生地点率（本年 12%、平年 9%）といずれも平年並~やや高い発生状況で、気象予報の向こう 1 カ月の気温が平年より高く、降水量も平年より多いと予想され、本病の発生を助長する条件であることより、今後、**8 月の発生はやや多くなると**予想しています。

前年、発病のみられた圃場や常発圃場、飼料用米など多肥栽培の圃場では、発病状況をよく確認して必要に応じて対策を実施してください。

<防除のポイント>

1. 発病斑は水際に近い下位葉鞘から発現し、次第に上位葉鞘に進展するため、薬剤散布は下位葉鞘にまでかかるよう丁寧に行います。
2. 前年に発病がみられた圃場では発病しやすい傾向があるため、特に注意して発病の確認と早期の防除を徹底します。
3. 薬剤を散布する場合は、**収穫前日数に注意し**、また、周辺の早生品種などに飛散しないよう十分注意します。
4. 出穂後は間断灌漑（2~3 日で自然落水後、田面が乾く前に入水する）作業を継続します。
5. 湿田では、収穫期の落水を早めにします。

表 1 水稲 紋枯病の主な防除薬剤（平成 30 年 8 月 2 日現在）

薬剤名	希釈倍数	使用時期 / 使用回数	分類
モンカットフロアブル	1,000~1,500 倍	収穫 14 日前まで / 3 回以内	7
モンセレンフロアブル	1,500 倍	収穫 21 日前まで / 4 回以内	20
バリダシン液剤 5	1,000 倍	収穫 14 日前まで / 5 回以内	U18
リンパー粒剤	3~4 kg/10a	収穫 30 日前まで / 2 回以内	7

注 1) 無人ヘリまたは少量散布専用ノズルを装着した乗用型散布機を用いる場合は、それぞれの農薬使用基準を遵守して使用してください。

注 2) 粒剤は、発病斑が地際から 20 cm 位の所にまでにある場合に散布すると有効ですが、上位まで進んだ場合は効果が低下します。

注 3) 分類欄には、FRAC コードを記載しました。同一分類（コード）は作用点が同じなので、連用は避けてください。

農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。

※ JA 全農いばらきホームページでもご覧になれます。



生産資材部 営農企画課

電話：029-291-1012 FAX：029-291-1040